
魔人の力を宿した使い魔

roc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人の力を宿した使い魔

【Nコード】

N4119W

【作者名】

r o c

【あらすじ】

使い魔召喚の儀式でルイズが呼び出したもの。それは・・・黒髪の青年と、とある魔人の肉片だった！！
ハルケギニアの未来にある種の暗雲が立ち込めてきたような気がする小説です。

本作では登場人物の一部に、ドラゴンボールシリーズの技が含まれます。

10/1追記：「あのゼロ保管庫」に凄く似たタイトルのSSが

合ったので、小説タイトルを変更させていただきました。

召喚された青年・・・と肉片!?

とある地にて、桃色の肌を持つ生物と金色に輝く髪の方が激しい戦いを繰り返していた。

いや、もはや「激しかった」と過去形で言うべきか。数多の強き戦士たちを時には圧倒、時には逆に圧倒されたその『生物』は、戦士たちを幾度となく自らの中に吸収し並ぶ者のない力を入れた。

だが、その栄光もほんの一時でしかなく。互いを好敵手として認め合った二人の戦士が二度と元の生活に戻れないことを覚悟の上で合体を行い、その『生物』を完全に手玉に取っていた。

実力の差が過ぎた事により調子に乗ったのか、一時は『生物』によりコーヒーキャンディーに変えられるなどの危うい事態にも陥ったが、実力の差があり過ぎる場合は外観を変化させられても強さと意識は残るらしく

小さくなった外観によりますます『生物』を翻弄・圧倒。しまいには自ら『生物』の喉に突撃し、喉だけでなくその後ろにあった触覚のようなもので突き破っていつてしまった。

触覚を本体から切り離すこと、これが『戦士』の狙いの一環であった。だがここで、予想だにしない事態が起きた。落下地点に突如として鏡のようなものが出現し、そのまま吸い込まれて消えてしまったのだ。

切り落とされた触覚に指令を送れなくなった『生物』は後に少し慌て、急遽別的手段で『戦士』の吸収を狙ったという。

以降の状況は、今後この物語には一切関わることはないため割愛させていただきます。

ところ変わって、ここは異世界ハルケギニア・トリステイン王国の魔法学院。現在は二年の進級試験として今後の人生に関わる大事なイベント『使い魔召喚』の儀式の途中であった。

既に大半の生徒は召喚を終え、各々が呼び出した使い魔と契約を完了していた。残るはただ一人、学院内において学問の成績が良いが実技の結果は全然成果を出せていないというある意味問題児。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。彼女は何か魔法を使おうとすると元の魔法を無視して爆発が発生するという異常な人物であった。

魔法の発動というプロセス自体はきつちり踏破しているのだが、望んだ結果になった試しが一度もないため今では（目的の魔法が成功率ゼロという意味で）ゼロのルイズと呼ばれている。

当の本人もそれにコンプレックスを感じていた時期もあったのだが、最近では発動させる元の魔法により微妙に爆発の攻撃力や効果範囲が異なることに気付き、研究を始めてしまっている始末である。

そんな彼女の召喚は30回を超える魔法の行使においてもまだ成功せず、もはや儀式用に用意された魔法陣が殆ど跡形も残っていないという状態になっていた。

「うう、いつになったら召喚できるのよ……。そろそろ疲れてきたわ」

召喚を行う魔法『サモン・サーヴァント』は自分の精神力を用いて空間に干渉し、対象を呼び寄せるため必然的に負担が大きくなる。並のメイジであれば、日に5回も行えばその日の精神力が尽きてもおかしくないのだ。

とはいえ、普通は1回で呼び出すものなので日に数回以上この魔

法を行うこと事態がおかしいのだが・・・それを30回も行えるあたり、彼女自身も何か異常なのかもしれない。

生徒たちの殆どは恒例行事と成り果てているルイズの爆発に既に飽きており、あくびをしたり談話をしたりともはや事の成り行きをまともに見ようとしている者はいなかった。

「ミス・ヴァリエール・・・今日はもうこれくらいにして、また明日やらないか？そろそろキミも限界だろうし・・・」

「いえ、ミスタ・コルベール！！あと1回だけ、あと1回だけやらせてください！！」

自分が起こした爆発の余波により、埃を大量に被って小汚い格好になってしまっているルイズは、心配して近寄ってきた教師・コルベールに凄まじい勢いで詰め寄った。ここで成功させることができなければ、そのまま退学になる可能性が濃厚であるため彼女も必死なのだ。

「わ、わかった！！あと1回、あと1回だけだぞ！！」

ルイズの勢いに飲まれ、つい承諾してしまったコルベール。しかしそれも無理はなかった、今のルイズは服装もかなり小汚くなっているのに加えて目が相当据わっていたのだから。そんな状態で詰め寄せられたら、かなりの迫力であることは必然。

「ありがとうございます」

召喚の継続を認められたルイズは、自らの全てを懸ける思いで杖を持ち直した。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司りしペンタゴンよ・・・！！全ての次元・全ての時を隔て、私の定めと共に歩みしく使い魔を召喚せよ！！！」

そう声高らかに叫んだ後（詠唱というよりは、寧ろ叫んでいたと形容するほうが正しかったと後にコルベール氏は語った）、ルイズは杖を前に突き出すのではなく、

自らの足元にある崩れかけた魔法陣に勢いよく突き刺したのだ。

その瞬間、崩れかけた魔法陣がみるみるうちに修復・拡大され、元の倍はありそうな大きさにまで広がった。

「な、なんだあの儀式の手法は！？召喚用の魔法陣を修復し、更に拡大まで！？」

「ヴァリエールの奴、いったいどんなトリックを使ったんだ！？あんなの見たことも聞いたこともないぞ！！」

今まで真面目に見ようともしていなかった生徒たちだったが、この予想外の事態にはさすがに注目した。事態はそれだけに留まらず、魔法陣からはこれまでどの生徒たちが使い魔を召喚したときにも発生しなかった、巨大な光の柱が発生していた。

だがそれも束の間のことだった。

ズドーーーーーッッッッッ！！！！！！

光の柱は爆音とともに根元から消滅し、かつてない規模の土煙がもうもうと立ち上った。そしてその爆発の根元にいたルイズ本人も生徒たちの近くにまで吹き飛ばされていた。

「ゲホゲホッ、何なんだよ今の物凄い爆発は！！ヴァリエールの奴、また爆発のバリエーション増やしやがったのかよ！？」

「あんなのマトモに食らったら、それこそ死ぬわよ！！」

生徒たちの間に不満が募り、その不満はルイズにぶつけられようとしていた。

「うん、お待ちなさいミス・ヴァリエール！！魔法陣の中に何かいますぞ！！」

「えっ！？」

もしか、成功したのだろうか。期待と不安を抱きつつ魔法陣の元に走るルイズ。そこには、不思議な光沢を放つ服装を着ている黒髪の青年と、自分の髪の色と同じ色の触覚・・・のような何かがあった。それを目にした瞬間、ダッシュで駆け寄ってきたルイズの足が止まった。

「あんだ・・・と、それ、何・・・？」

黒髪の青年の隣にある、奇妙な物体。それが一番奇妙に感じたルイズは、真つ先にそれを指差した。

「え・・・？・・・うわっ、何だこりゃ!？」

自分の隣にある物体を目にし、驚く青年。どうやら彼にも知らない代物らしい。

(と言うか、私・・・あんな奇妙な物体とも契約せにやならんのかい!？あつちの平民っぽいのなら言葉が通じているようだからわかるけどさ!！)

改めて、ルイズは自らが呼び出した使い魔候補をまじまじと見つめる。一人は間違いなく人間、十中八九平民だろう。着ている服装は見た事もないモノだが、

もしかしたら自分が知らないだけでどこかの国では普通に販売されているのかもしれない。何より言葉が通じているので、説明すれば何とかなるだろう。

問題は、彼も知らないらしいあの奇妙な物体だ。怪しい、怪しすぎる・・・。ヘタに触れたら取り返しのつかないことになるかも知れない。

触れるべきか、触れざるべきか。そんな事を考えていたルイズだったが、不意に響き渡る悲鳴に思考は中断された。

「う、うわー！ー！?？むごっ!！」

突然の悲鳴によって我に返ったルイズが見たもの。それは、あの物体がかの青年に覆い被さり、一息に包み込んでしまったというシヨッキングな状況だった。

「んごーっ、んごんご、んごーっ!！」

「クッ、何て状況なのアレは!！でも今ならまだ!！」

まだ悲鳴は聞こえる。まだ間に合うかもしれない、そう思ったルイズは突き刺さったままの杖を引き抜き、残された精神力を使って

爆発を起こした。

ボスンッ！！

小気味の良い爆音と共に、爆発がうごめく物体を直撃した。だが物体のうごめきは全く止まらず、ついにはかの青年を完全に飲み込んでしまったようだ。

後に残るのは、先ほどまでの人間一人を飲み込むかのような異様な大きさではなく、一転して絨毯のような小ささとなった桃色の物体のみ。

シーーーーーン……………。

目の前で、人が謎の物体に飲み込まれるという事態に誰もが呆気に取られていた。

特にコルベールは、異常な事態が立て続けに起こる今回の召喚の儀式に恐怖を感じていた。

魔法陣が修復されたかと思えば、突然拡大。更には平民らしき青年と謎の物体の同時召喚、極めつけは謎の物体が青年を飲み込んでしまうという、異常事態のバーゲンセール状態。

とてもあんなのとは、契約を勧めるわけにはいかない。触れたら最後、おそらくルイズも飲み込まれてしまうだろう。

そしてかくいうコルベール自身も、あんなのを相手にして勝てる見込みはまるでない。触ったら即アウトなのは明らかなのだから。

誰もが声を出せずにいる中、再び動きは起きた。

グニョッ、ウニョウニョウニョ……………

「「!!??」」

あの物体が、また動きを見せ始めた。ここにいる全員を飲み込むつもりなのか、そう警戒心を抱くコルベールとルイズ。

だが、こちらに向かつてくる気配はなく、その場でどんとんと形を取り始めた。そう、まるであの青年の姿を再現するかのごとく・

「ぶはあっ!!!あーくそっ、エライ目に遭ったぜマジで!!不審なモノにはやつぱ無闇に触るもんじゃねえな!!」

うごめきが終わると、完全に青年そのものとなった。その姿を確認したことで、何故かルイズは安心したのか肩の力が抜け、ヘナヘナと座り込んだ。

まわりの生徒たちも一安心したのか、胸をなでおろしたりなどと緊張を解くものが多く出た。コルベールもまた然りで、あの青年が謎の物体を何らかの要因で無力化したのだろうと判断。これ以上の脅威は起こりえないだろうと見なし、予定通りルイズに契約を勧めることにした。

「さ、さあミス・ヴァリエール。一度召喚を行った以上、相手が何者であろうと契約は必須事項です。早いところ済ませてしまいなさい」

「は、はい・・・!!」

コルベールに契約を促されたルイズは、もう限界に近づいている身体に鞭を打って青年の元へと歩いていく。

「悪いけど、体力がもう限界近いから説明は後にさせてね・・・。我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴンよ。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そう言うが早いか、もたれかかるようにして青年の唇に接吻を行うルイズ。その瞬間にルイズは一瞬目を見開き、数秒の後にルイズは唇を離すと同時に完全に倒れてしまう。

「お、おい！？その子、大丈夫なのか！？」

「ミ、ミス・ヴァリエール！？……どうやら、精神力と体力を使い果たしてしまったようですネ……。ある程度休ませれば大丈夫でしょう」

「そうか……。オレの事で疲れ切った身体にトドメ刺したようなもんだからな。少しは気になっちまうよ」

「心優しいんですね、キミは……。そういえば、今の『契約』の際に身体にルーンが刻まれるので、身体に痛みが生じるはずなのですが……。大丈夫なのですか？」

ルーンの発生時には痛みが生じる、これはどんな生物相手に契約を行ったとしても代わらない結果なので、その痛みを訴える様子がない青年にコルベールは疑問を抱いた。

「痛み？ああ、左腕の甲がほんのちよつとだけチクツとしただけさ。こんなのわざわざ痛みを訴えるうちにも入らないな」

「そうですか……。コホン、私はジャン・コルベールと申します。失礼ですがルーンをお見せいただきたいのと、お名前をお伺いしてよろしいでしょうか？」

その言葉を聞いた青年は、左手の甲を見せながら名乗った。

「ああ、オレの名は平賀才人。とある魔人の力と記憶を取り込んだ者さ」

召喚された青年・・・と肉片！？（後書き）

魔人の力と記憶を取り込んだと告げる才人、はたしてそれは嘘か本当か！？

そもそも才人はどうやってあの状況から復帰したのだろうか！！

そして何より、契約を交わしたルイズとの関係はどうなるのだろうか！！

次回、その謎の一部が解き明かされる！？（予告内容が履行される保障はございません）

使い魔生活のはじまり、とルイズバースト事件

コルベールから使い魔召喚の儀式の概要と目的を一通り聞いた才人は、その対象に自分と魔人の肉片が選ばれたことに対して、思わず突っ込んでいた。

「それって相手の意思を無視して呼び出すんだから、モロに誘拐や拉致の域に入るんじゃないかねえか？」

それを指摘されたコルベールは、召喚される側の立場になって考えたことがなかったと思い直し、契約を成立させる後押しをしてみんなしたことを詫びた。

更に話を突き詰めて聞いていくと、もっとなんてでもない事が発覚。

1、一度召喚して契約したら対象が死ぬまで契約解除は不可能。
2、召喚した使い魔が生きている限り、別の使い魔を召喚するのは不可能。

3、一度呼び出した使い魔を元の場所に送り返す魔法はない。または確認されていない。

つまり、呼び出した時点でもう使い魔候補の人生が一本のレールに固定されたようなものだった。

「コルベール先生・・・」

儀式の責任者であるコルベールを、恨みがましい目で見る才人。あんたが元凶か、という言葉なき訴えがひしひしとコルベールにも伝わってきた。

「・・・すまない。私のほうでも、君を送り返す方法がないかどうか探してみよう。君にも家族や故郷があるだろう、不甲斐ない私をどうか許してほしい」

真剣な表情で頭を下げるコルベールを前にしては、才人もこれ以上強く出る気にはなれなかった。

「まあいいですよ、オレもあのまま元いた世界でダラダラやっていくよりは、多少なりとも刺激のある日々のほうがいいと思い始めてきましたしね。帰還の手段が見つかるまでの間は、使い魔ってヤツをやらせてもらいますよ」

そう言うのが早いのか、才人は気絶しているルイズに人差し指を向けた。すると不意にルイズの身体が浮き上がり、才人の横に並んだ。

「な、それはいったい！？まさか君はメイジなのか？・・・いや、それにしても杖がない・・・」

「機会があつたら、じっくりと話しますよ。じゃあ、また何か用があつたら呼んでください」

前のめりに倒れたまま浮かぶルイズを伴いながら、学生寮へと立ち去っていく才人。その姿を見送りながら、生徒たちの一人が

「あれ？誰かあいつに寮の場所なんて教えたっけ？」とポツリともらした。

それを聞いた途端にコルベルもまた驚いたが、既に本人たちがいないのでこの場ではこれ以上気にするのはやめ、残った生徒たちに寮へ戻るように言い渡した。

今日はこれ以上、授業を行わせる気は彼にもなかったからだ・・・。

学生寮の、ルイズの自室。そこで彼女は目を覚ました。

「・・・あれ？何で私、自分の部屋に戻っているわけ？」

確か自分は、使い魔の召喚の儀式に参加していたはず。そこで30回近く失敗したあと、頭の中にパパッと浮かんだ呪文を使ってダメ元でやってみたら、平民っぽい青年とピンク色の変な物体が出てきて・・・。

「あ、ー、ー、ー、ー、っ！！！！そうだ私、契約する瞬間に何かトんでもないのを頭の中にブチ込まれたんだっただわ！！！！ちよっとメ

モっておかないと!!」

自らの頭に流し込まれた「何か」を、しっかり把握するために、ルイズは手ごろな引き出しから筆記具を取り出し、普段は乱雑に扱っているノートの空いたページに書き記していく。

「えーと・・・マドウシバビディ、ダーブラ、カイオウシン、フュージョン、アメダマになっちゃえ、カメハメハ、このホシを消す、ジンゾウニンゲン、オツスオラゴクウ・・・」

頭の中から引っ張り出した記憶を順不同で記述しているうちに、ふとノートを見つめなおしてルイズは思った。

「何コレ」

いくら何でも、これはないだろうと我ながら思うルイズ。台詞とか用語とか名称とか、浮かんだ順に即書いた結果がこれであった。何がどれと結びつきがあるのか、全然わからない。

「パニックになったときつて、本当にまともな行動しないものね。前に誰かが言っていた言葉だけど、それを身を持って体験することになるとは思わなかったわ」

少し頭の冷えたルイズは、そういえば・・・とある事を思い出した。儀式のときにだいぶ服がボロボロになり、それなりに怪我もしていたので着替える必要があると考えたのだ。

まずは怪我の確認を、と思いき鏡の前に立つルイズ。だが・・・
「あれ？怪我一つしてない・・・それに服も完全に元通りになってる!？」

召喚の儀式を始める前の、怪我一つなく衣服の破れもない状態になっっていたのだ。

「これはいつたい、どうということなのかしら・・・。あれ、額に何か文字が・・・」

この時ルイズは、気付いてしまった。ある意味、気付いてはいけない要素に。確認しようと髪の毛をかきあげ、額を鏡で確認する。

そこには、『M』の文字が浮かび上がっていた。

「—————」
「——！！！！——」

声にならない絶叫と共に、学生寮の一室が一瞬にして壊滅した。

「今、凄まじい気の膨張があつたな……。あのルイズって子の気だが、いったい何をやらかしたんだ？」

取り込んだ魔人の力などを確認するために自身の内面世界に意識を傾けていた才人だったが、不意に感じた莫大な気の膨張を感じ取り現実に引き戻された。

「ひとまず確認しに行つてみるか……。まずはこいつから試してみるか」

才人は右手の人差し指と中指を額に当て、一瞬でその場から姿を消す。

次の瞬間、才人の姿はルイズの目の前にあつた。

「おいおい、いったいどうしたつてんだよ？自分で自分の部屋をサラ地にするなんて、あまりいい趣味してるとは思えないな」

呆然と立ち尽くしていたルイズに声をかけた才人だったが、次の瞬間にはルイズに勢いよく両肩を掴まれた。

「あっ、あんたでしょこの額の変な文字入れた張本人は！！いきなり額に『M』って何よ、『M』って！！女の子の額に文字が浮かぶこと自体色々よろしくないつてのに、ただ単に『M』だなんてラクガキされるより酷いじゃない！！」

「ちょ、おま、落ち着けヤメレ！！一つ一つ、順番に状況を整理していこうじゃないか！！」

猛烈な勢いで肩を揺さぶるルイズを何とかなだめようとする才人だが

「これが落ち着いていられると思ってるの！？だいたいそもそも何なのよアンタは・・・」

まるで聞く耳を持たず、かえってヒートアップしてしまったようである。

このままでは埒が明かないと判断した才人は、目から軽く衝撃を飛ばし、少しだけルイズを吹き飛ばす。吹き飛んだ際に生じた隙を狙って、才人は一瞬だけ力を集中させてルイズにツバを浴びせた。

「ちよっと、ツバなんて汚いじゃない！！・・・え、うそ・・・何これ！！身体が、石になっていく！！」

足元でツバを浴びたルイズは、足元から徐々に石化しだしていた。そのスピードは決して早くはないが、既に膝から下は完全に石になっていた。

「ま、まさかコレって・・・ダーブラってヤツの石化ツバ能力じゃあ・・・」

「ご名答だ。魔人の細胞の中には、ダーブラをチヨコレートに変えて食べた記録が残っているんだ。それらを参考にして吸収した連中の記憶を遡っていった結果、かなり多くの技が使えることが判明したのさ」

「何てことなの・・・！！そ、それよりも早くこれを止めて！！それともまさか私を全身石化させて鑑賞でもする気なの！？」

もはや胸より下は完全に石になってしまっており、この時点でルイズは四肢全てを封じられたようなものだった。

「安心しろよ、もうそれより先には石化はあがってこないから。それよりだ、オレの話をきちんと聞く気にはなったか？その気がないというのなら・・・お望み通り全身石化させて鑑賞するが」

「聞きます、喜んで聞かせていただきます！！だから鑑賞用にする

のはやめて~~~~!!!!」

才人から一通りの話を聞いたルイズは、先ほどまでとは異なり落ち着き払った表情で状況を整理していた。なお、話を聞く姿勢を見せた時点で既にルイズは石から元に戻っている。

「だいたいわかったわ。あんた・・・才人は魔人の力と記憶、そして体質もあの時点で身に着けちゃったってことなのね。要はあのときをもって人間とはオサラバしたと」

「何気に言ってることがえげつねえな・・・まあ間違っちゃいないんだけどさ」

全ての話を統括すれば、ルイズは相当の実力者を使い魔として手に入れたことになる。どれほどのメイジが束になってかかってきても敵わないような戦闘能力に、全身を一度に消し飛ばされない限りまず死なない体質。

「・・・うん、アタリもアタリ、超大当たりね。ところでさ、私の額に書き込まれた紋章ってどうにかなんないの？」

「あれ、気付いてないのか？そいつならもう消したけど。本来ならそれがついてると洗脳されるらしいんだが、オレはそんなことする必要がないからさっさと消したぞ」

「え、いつの間に！！じゃあ何で契約したときに紋章が書き込まれたのかしら・・・」

必要がないなら、最初から書き込むなという思いで訴えるルイズ。「魔人の細胞なりの抵抗だったんじゃないか？今では完全にオレ自身の細胞として働いているけど、さっきの段階じゃ制御しはじめて数分だったからまだ自衛機能が働いていたんだろうな。ま、オレの予想に過ぎないがな！」

しかし才人の言葉は、ルイズは途中から聞いていなかった。ルイ

ズは部屋を吹っ飛ばしてしまったことを思い出し、その処置をどうしようかと思いつめていたのだ。

後で才人に相談したところ、復元魔術で部屋全体を20分前の状態に巻き戻すことであっさりと元に戻った。もっともノートも白紙に戻ってしまったので、書き直しになったらしいのだが。

使い魔生活のはじまり、とルイズバースト事件（後書き）

双方の理解が得られ、まずまずの滑り出しを見せた才人とルイズ。しかし周囲の理解はまだ殆ど得られておらず、波乱万丈の予感が続いていた！

はてさて、今後どうなってしまうのだろうか。

次回、今度は教室が吹っ飛ぶ！？

ルイズは「爆発波」を覚えました。

ルイズさんの異文化接触タイム（前書き）

今回、後半がちよっと急展開気味ですがご了承ください。幸いです。

それでは第三話と、同時投稿の人物紹介も併せてどうぞ。

ルイズさんの異文化接触タイム

復元魔術により部屋を元の状態に戻し、改めて先ほど脳裏に浮かんだ用語などをノートに書き写していくルイズ。その途中、ふと疑問が浮かび上がった。

「そついえば才人、どうやってここが私の部屋だってわかったの？
コルベール先生や他の生徒たちにも聞いたの？」

「いや、お前の記憶を覗かせてもらった。それが一番楽だったしな」
「うわあ、プライバシーも何もないじゃないそれ。個人情報保護法違反で訴えるわよ」

誰でも、勝手に頭の中を見られるのはさすがに御免被る。半睨みするような目つきで才人に視線を向けるルイズ。

「そいつは勘弁してくれよ、副次作用としてこの世界の主要な文字とか全て覚えられたんだからさ。それにしてもルイズはかなり学問の成績がいいな」

「フフン、モチのロンよ！！筆記試験の成績はいつも学年上位なんだからね」

鼻を高くして自慢げに語るルイズ。この時点でルイズはあつという間に、脳内を覗かれた不快さをあっさりと忘れてしまっていた。

「いやー、ホントすげえわルイズは。今度はオレに勉強でも教えてくれねえかな」

「そつちの学問は全然わかんないからムリよ。他人に教わろうとする前に、自分で勉強して覚えなさい」

えー、と不平を漏らす才人を軽く聞き流し、一通りの記述を完了させるルイズ。ノートに書かれた文面を改めて見直してみると、魔人の記憶だけでは説明がつかない単語なども多くあった。

自分一人だけの解決は無理そうなので、ルイズは才人にノートを見せて解決を図ることにした。

「以上が、私の頭の中に流れ込んできた単語などよ。このうちの一部って、才人の知っているものじゃない？」

「ああ、間違いなくオレの世界に関係する単語だな。ノートパソコンと携帯電話は、ちょうど今持っているから見せることと説明ができるけど、必要か？」

才人の問いに、ルイズは首を横に振る。

「ううん、しなくていいわ。どう説明されたって、ハルケギニアの知識が重視された今の私の脳内じゃ理解できそうもないしね。数ヶ月前の私だったら癩癩を起こして八つ当たり、または才人の言うてること全てを全否定しているところよ」

「うげ、そいつは勘弁願いたいな。あ、そういえば・・・」

ふと何かを思い出したかのような才人の表情を見たルイズは、どうかしたの？とばかりの表情に変わる。才人は左腕に力を込め、契約の際に刻まれたルーンを浮かび上がらせた。

「このルーンってのに、何か効果でもあるのか？人前で刺青のようなものを見せるのも揉め事の種になりかねないから、さっきまでは沈めてただけだよ」

「ル、ルーンを沈めて隠すって・・・何かとんでもないわね・・・このルーン、どこかで見たことがあると思ったら『ガンダールヴ』のルーンじゃないの。珍しいわねえ」

「ガンダールヴ？何だそりゃ・・・」

さすがにガンダールヴとやらについては、ルイズを介しただけでは殆ど伝わってこなかったために質問を行う才人。

「始祖ブリミルが使役したとされる4人の使い魔の一人、『神の盾』ガンダールヴのことよ。このルーンが発現した状態で武器を使った行動を行うと、身体能力が向上するらしいわ」

「そいつは便利そうだな。しかし伝説級のルーンか、これが知れ渡ったらまた大変なことになりそうだな・・・。コルベール先生にもメモ取られちゃったし」

「ミスタ・コルベールに……。遠からずオールド・オスマンにも報告が入りそうね。そのときの対応次第では、厄介なことになるかもしれないわね……」

遠からず、それは現実となるのだが今の才人とルイズにはそれを知る由はなかった。

その後、色々と知識などの交換を繰り返したルイズと才人。

才人は思いのほか伝説などに詳しいルイズの知識に驚き、ルイズは才人の世界の技術力に大いに驚かされた（結局ノートパソコンや携帯を見せてもらった）。

特に才人が持っていた携帯電話やノートパソコンを目の当たりにしたときは非常に驚いた。自分の持つ知識で、代用できる要素が全く見つからなかったからだ。

「数十年前には、今の時代の予測を立てて漫画を描いた人もいたらしいんだけどさ。そういった人でも携帯電話だけは予測ができなかったらしいぜ」

過去の人間が予測できない事を、違う世界の人間が予測できるはずもなかった。

「ねえ才人、このケータイの左上のほうに三本のラインっぽいのがあるんだけど。これは何かしら？」

携帯の画面を指差して見せるルイズ。一番左から順に、ラインが長くなっている。

「ああ、これはな……。って、電波が通じてる！？良いところに気が付いてくれたなルイズ、これでオレの家族と連絡を取ることができるぞ！！」

「……へ？」

ついぞ間抜けな声を出してしまうルイズ。そんなルイズに構わず才人は即座に電話をかけ、信用されないのを覚悟で現在の状況を家

族に伝えた。

『うーむ、にわかには信じられないが……。とりあえず簡単にウチには戻ってこれられない状況ってのは理解したぞ。それにしてもよく別の世界から通話なんぞできたな』

「オレもさっきまで電波が通じていることを知らなくてさ。そういや少し気になったんだけど、時差とかって起きてるかな？オレの感覚ではまだ3時間程度しか経過してないんだけどさ」

『いや、多分ないと思うぞ。お前がパソコンを引き取るために家を出てからだいたい3時間半くらい、今は午後5時半あたりだからな』
「そっか、ここでの3時間半がそっちでは数十日ってなってる可能性もありえたからほっと一安心だよ」

才人の通話を傍から聞いていたルイズは、だんだんと自分がとんでもない事をしでかしたという事実が気が付いた。

先ほどは召喚が成功したことにはばかり気が行っていたのだが、よく考えてみれば何も知らない遠方からの生物を無理矢理自分の元に呼び寄せ、問答無用で支配下に置き、一生自分のために働かせる。

これはどんな強制労働だ。そしてこの状況を自分の家族に置き換えたら、どんな気分だろうか……。

考えただけで、嫌気がする。嫌味たつぷりながらも頼れる長姉・エレオノールに、ちい姉さまと慕い優しくしてくれる次姉・カトレア。

そして厳格ながらも、まともな魔法を成功させなかった自分を見放さずに見守ってくれた父と母。そのうち誰か一人でも自分の元から無理矢理引き離されたとしたら、きつと自分は正気ではいられないだろう。

思わず身震いしたルイズは、才人に電話を代わってもらおうように頼み、自らの口で才人の家族に自分がしでかした行為を詫びた。

そのときに才人が「まだ話してる途中だったのに……」と呟いたのだが、誰の耳にもその言葉は届かなかった。

『よく話してくれたね、お嬢さん。キミのような素直な子なら、うちの息子を任せてもよさそうだ』

「えっ！？ちよっ、ちよっとおじ様！それはいったいどういう意味なんですかー！！」

『はっはっはっ、好きなように解釈するといいさ。とにかく連絡がとれるとわかった以上、最低でも週に1回は連絡してくれるように才人に伝えておいてくれないか』

「わ、わかりました……。あの」

ピー、ピー！！　ピー、ピー！！

「な、何の音!?!」

『む、才人の携帯が充電切れ間近のようだな。できればもう一回才人に変わってほしかったが、この状況では致し方あるまい。お嬢さん、才人には休学申請をしておくから学校は気にするなと伝えておいてくれないか』

「は、はい！わかりました!!」

『うむ、ではくれぐれも才人のことを頼んだ』 (プツツ)

ピーーーーーッ………

シーン………

「……何も聞こえなくなっちゃったわ……」

呆然としたような表情で、携帯を手にもったまま才人の方向を向

くルイズ。

「携帯に蓄えてあった、動かすための動力……いわゆるバッテリーが尽きたな……。せつかく連絡ができることがわかったのに、これじゃ1回こっきりで終わっちゃうぞ……」

当然のことながら、ハルケギニアには電力機関もなければコンセントもない。せつかくの光明も即座に閉ざされてしまうのか、そう才人が考えていた矢先の事。

「あっ！！ねえ才人、瞬間移動使えばいいんじゃない！？さっきのヤードラット式のじゃなく、キビト式の方を！！」

ルイズの発案を聞いた才人は、キビト式の瞬間移動がどういったものなのかをすかさず記憶から手繰り寄せる。そして、すぐに表情が明るいものへと変わった。

「おお、いいアイデアじゃないかルイズ！！場所さえわかればどこにでも行けるから、知ってる場所に行くならこっちのほうが確かに有利だ！！」

「でしょ、でしょ！！さあ才人、早いところ行きましょう！！これなら連絡とか何とかも含めて、色々な問題が一気に解決するわ！！」

「おうつ、それじゃオレの身体はどこかに触れてくれ！！『カイカイ』！！」

呪文を唱えた瞬間、才人とルイズは一時ハルケギニアから姿を消すこととなる。

キビト式瞬間移動でハルケギニアから、才人の自宅へと戻ってきた才人。

すぐにルイズを伴って自室から階段を下りて居間に向かい、改めて家族にルイズを紹介。ルイズも再度、才人の家族に詫びた後に自己紹介を済ませた。

これにより、ルイズの中にあつた罪悪感はようやく払拭され、才

人や才人の家族と共に談話を楽しむこととなった。

「それにしても、才人も結構凄い体験をしたんだなあ。世界を滅ぼしかけた魔人の力を身に宿すなんて・・・力に溺れて悪い意味で有名人になつたりするなよ？」

「こ、怖いこと言うなよ親父！！オレはそんなことしたりしねえよ！！！」

才人は父・流人りゅうとに冗談交じりで脅され、自分はそんなことはしないと慌てて否定。その反応を見た流人が豪快に笑つたりなどしていた。それをルイズと、才人の母・友香は笑つてみていた。

「あの人も本当に冗談を言うのが大好きなのよ。そこが良くて、私も流人さんを気に入つただけだね・・・。ルイズちゃん、飲み物のお代わりはいかが？」

「あ、はい。もう一杯いただきます・・・。それにしても変わった飲み物ですね、このコーラってのは」

「あつ、コーラの飲み過ぎには気をつけるよルイズ。その中に含まれている『カフェイン』って成分は取り入れすぎると依存になるらしいし、夜に眠りにくくなるぞ」

「え、っ！！！！？？？べ、別の飲み物にしてくださいおば様！！」
だが時既に遅く、コップに並々と注がれたコーラがルイズの目の前に出され、友香がニコニコとしながら「遠慮しないでお飲みなさいな」と目で訴えていた。

結局ルイズはそれを断りきれず、最終的には1.5リットルのペットボトル内の半分近くを飲む羽目となったとか何とか。

その日ルイズは魔法学院には帰らず、才人の家のキッチンルームにあるソファの上で寝ることとなった。コーラの飲み過ぎ&水分の取り過ぎのためか頻繁にトイレに起き、なかなか寝付けない一夜を過ごしたという。

翌日、才人に魔法学院に戻してもらったのだが、あまりの眠気の

ために朝食を食べ損なったらしい。合唱。

——もうコーラは懲り懲りだわ。 b y ル イ ズ

ルイズさんの異文化接触タイム（後書き）

夜の間にも眠れなかった影響は、根強かった……。
眠気を引きずったまま授業に臨んだルイズ、そして同席する才人。
魔法学院での暮らしを学んでいく才人の前に、トラブルが舞い降り
る！！

次回、はじめて魔人の力が魔法の前に振るわれる！？

キャラクター紹介・序盤編

平賀才人

本作の主人公・その1。ルイズによって魔人ブウの肉片と一緒に召喚される。

召喚直後にブウの肉片にいったんは飲み込まれるものの、逆にその力を取り込んで生還。

肉片に蓄積された記憶や経験を己のものにし、極端に強くなっている。

体質までブウ化しており、全身が一度に消滅しない限り死亡しない。

悟飯吸収状態までのブウの技を全て使用可能な他、吸収した人物の記憶から探り出した技も使用することが可能。ベジットとも交戦中であつたため、彼が見せた限りの技は使用可能。

瞬間移動はヤードラット式とキビト式の二種類が使用可能。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

本作の主人公その2。やぶれかぶれの召喚の末に、ブウの肉片と才人を同時に呼んでしまった。

契約を行った際に、肉片の中にあるバビディの魔術を受けて一時的に洗脳状態になったが

術者である才人がすぐさま洗脳を解除、額の紋章も消滅した。

全くの異邦人である才人の言う事をあまり疑わず、『自分の知らない事』ありえない事』という原作の考え方からはかなり離れている。

どんな魔法を使っても尽く爆発するため、開き直って爆発魔法を突

き詰めていくことにしたらしい。

なお、ガンダールヴのルーンから洗脳効果は最初から付随されていない。

魔法学院一日目・前編（前書き）

今回、かなりリアルにギーシュの性格が歪んでいます。

決闘の入り方も相当なこじつけ気味です。

ギーシュに愛着を持つ方は、気をつけてお読みください。

魔法学院一日目・前編

昨晚コーラを飲みすぎた影響で睡眠時間が大幅に削られ、朝食の時間を睡眠時間の充実に割り当てたルイズは今、かなりの空腹だった。

「あ〜う〜、お腹空いた〜・・・。何でもいいから食べたいわ・・・」

教室に入ったはいいものの、席についた途端に力なく前のめりに倒れこむルイズ。かなり重症である。

「おいおい、大丈夫かよ？これでも食って元気出しな」

同伴していた才人がポケットから豆のようなものを取り出し、ルイズの口の中にそれを放り込んだ。当のルイズ本人も、食べさせてくれるのなら何でもいいという無気力状態に陥っており、口を開いて待ち構えている始末だった。

ばーりばーり、ばーりばーり、ごっくん。

適度に噛み砕いて飲み込むと、急にルイズは満腹感を覚えた。しかもそれだけではなく、あれだけ酷かった眠気までもがすっかり解消され元気な状態になっていたのだ。

「あ、ありがと・・・。でも、今のってまさか・・・」

《ちよつと試しに作ってみた仙豆さ。どこまで効力とかを再現できたのかはわかんねえけど、急場凌ぎにはなつたる？》

才人からの返答は口から紡がれず、直接頭の中に響いてきた。何故か、と思つた矢先に教室の扉が閉められ、中年の女性教師が教壇の上に立った。

《なるほど、授業中に私語をしたら確かにまずいものね。心遣いありがとうね、今のでテレパシーの使い方もわかつちやつたわ》

テレパシーで受けた会話には、テレパシーで返す。ルイズの適応

力は既に結構なところまで行っていた。

「おはようございます、皆さんも使い魔の召喚を無事達成できたようですね。このシュヴルーズ、皆さんの成果を見ることも毎年の楽しみに行っているですよ」

そう言いつつ、一人一人の使い魔をじっくりと眺めていくシュヴルーズ。そして、ルイズの召喚した使い魔を目にしたところで動きが突然止まった。

「あ、あら……。ミス・ヴァリエール……。そ、そちらのお方は……。？」

ぎこちない口調で尋ねるシュヴルーズ。無理もない、実は彼女も昨日あの現場を遠目から見ていたのだ。才人がブウの肉片に飲まれたあたりで恐ろしくなつて、途中で逃げ出したのだが……。

よつてシュヴルーズは、才人が元の人の形を取り戻した経緯を知らない。

「あ、彼ですか。彼はサイト・ヒラガと申しまして、使い魔兼知人ですね。どつちかという知人としての意識の方が強いですけど」

「何だよ、知り合いだったのかそいつは。じゃああの召喚の儀式のときに共謀して、申し合わせていたんじゃないのか？」

不意に横から声が聞こえた。ルイズと才人が振り返って見てみると、太った少年が何やら嫌味つたらしい表情で見ていた。

「あら、マリコル又じゃないの。そういうあんたは何を召喚したの？」

「ふふふ、聞いて驚くなよ！ボクの使い魔はフクロウ、命名クヴァーシルだー！！」

椅子に足を乗せ、意気揚々と語るマリコル又。だが……

「で、そのクヴァーシルって使い魔はどこにいるんだ？確かフクロウって、夜行性だった気がすんだけど……」

「……部屋で寝てます。というか、連れてこようと起こしたら酷

く突っつかれました」

先ほどの威勢はどこへやら、あっという間に意気消沈してしまつたマリコルヌ。生態系の相違とは時に悲劇なものである。

「ミスタ・グラントブレも災難でしたね……。さあ、そろそろ授業を開始いたしますよ」

喧嘩の気配が弱まつたと判断したシュヴルーズは、ここぞとばかりに授業を始めることにした。生徒たちの喧嘩が続き授業にならない事も、教師生活の中では時折あったのだが今回はルイズの使い魔（らしき人）が上手く腰を折ってくれたために助かった。

才人も、自分への追求が止んだと判断すると教室の後方に下がり、静かに授業を傍観することにした。

およそ30分後、不意にルイズの方から才人へとテレパシー通話が入った。

《ねえねえ、授業が退屈で仕方ないから色々と考えてただけどね》

（待たんかこの不良娘、せっかくの授業を退屈だなんて抜かすな。で、どうしたんだよ）

ありがたい授業を退屈だとたまうルイズ。全世界の教師の皆さんに謝るべきだ。

《昨日、才人の家族の人たちと普通に会話できてたでしょ。召喚の儀式で呼び出した才人は言葉が通じるようになってもおかしくないけど》

（そういえば、本当に自然に話してたよな……。ハルケギニアの文字からして、日本とは随分と違うし。文明自体が根本的に違うから、普通は会話自体成り立たないよな》

《その事で色々考えたんだけどね。私もしかしたら、契約の時点で才人と体質が同期し始めたのかも知れないんじゃないかな》

（・・・なんですと？）

体質が同期。それはつまり、ルイズも魔人となりうる事を意味し

ていた。

《魔人の記憶が私にも流れ込んできた時点で、そもそも疑うべきだったのよ。契約ができたことばかりに気が行って、その先のもっと重要なことを完全に放り出していたわ》

（なんつーか、オレが言うのも何だけどさ。昨日を境に物凄いことが続いているよな、ルイズって）

肉片呼んだり、人間呼んだり、異世界行ったり、しまいには魔人候補者となったり。昨日を境に、確実にルイズの人生は波乱万丈となっていた。

《別にいいわよ、今更気にしても仕方のないことだもの。……あつ、そろそろ実演の授業に入るらしいからいったん切るわ！》

ブツッ

テレパシー通話が切れた直後に教室の前方を見ると、魔法の実演授業へと移行していた。会話を拾ってみると、どうやら『錬金』なる魔法の実演のようだ。

（錬金ねえ、地球でそんなのが使えたら大金持ちになれるだろうな。あ、いや待てよ……そうなったら貴金属の価値が大暴落してまた経済がエライことになりそうだな。そしたら物価がやたら高くなつて、大金持ちになつた意味がなくなるな）

ふと地球で『錬金』を行ったらどうなるかの顛末を考え、この魔法は使うべきではないと考える才人。

そうこうしているうちに実演はあつという間に終了し、同時に午前の授業も終了となった。

「今のところお腹はいっぱいだからお昼は別にいらないけど、デザートは食べたいのよね〜」

「……甘いモンばかり食っていると生活習慣病になるぞ……」

授業開始前に食べた仙豆の効果により、ルイズは今現在全く空腹はなかった。だが甘いデザートがあるとわかると話は別、アルヴィズの食堂と呼ばれる場所にてルイズはナプキンをつけて今か今かとデザートが運ばれてくるのを待っていた。

才人はルイズの隣で、他の生徒たちが食べ切れなかった食事を食べていた。ルイズからは仙豆を使えばいいじゃないかと言われたのだが、仙豆は瀕死の状態からも回復することができる貴重な回復アイテム。

先ほどは極度の空腹状態であったルイズを何とかするために緊急で使っただけであって、普段から食事のたびに仙豆任せにする気はなかった。

「お待ちせいたしました、貴族様。ご注文のデザートでございます」「おっしゃあゝゝ！！遂に来たか、イチゴのタルト・特盛スペシヤル！！」

「また高カロリーなモン頼んだなオイ！！」
テーブルの前にドン！！と置かれた特盛タルトを前に、ルイズの目は輝いていた。他の生徒たちや、メイドたちはその量の多さに唖然とし、中にはあまりの量に見えているだけで吐き気を催すものもいた。

「さあ、食うぞ〜！！」
「・・・もうオレは知らんぞ・・・腹下しても・・・」
もう止める気にはなれなかった才人であった。

「ご馳走様でした」

「食いきりやがったよこの人！！」
数分後、ルイズは見事に完食していた。いったい何故、食べきることができたのだろうか。

「好きなものは食べたくなるのよ、女の子って。よく言うじゃない、別腹って」

「そいつはそうだけどなあ・・・」

言葉を続けようとした才人だったが、これ以上言うのはやめにした。多分今の状態で何を言っても、聞き流されるだろうと思ったからだ。

「今度からはデザートだけってのはやめとけよ。厨房で料理を作ってくれの人に申し訳ないだろ」

「うん、そうするわ。・・・めっちゃ睨まれてるしね・・・」

厨房の方角から、何やら厳しい視線が注がれているのを感じ取ったルイズは、全身から冷や汗を流していた。

「それじゃあ次は何をするかな・・・。ん？あっちが何か騒がしいな・・・」

「あら、本当ね。・・・ってあれは・・・!!」

喧騒のする方向に視線を向けたルイズは、騒ぎの元凶にいる人物を見つけた途端に席を立っていた。

「キミが余計な事をしでかしたせいで、麗しき二人のレディの名誉に傷がついてしまった。どうしてくれるのかな？」

そう言い放ち詰め寄る金髪の人物、ギーシュ・ド・グラモン。

だが詰め寄られた側の人物である黒髪のメイド・シエスタも黙ってはいなかった。

「何を惚けたことを言っているのですか、ミスタ・グラモン？寧ろあなたの方が彼女たち・・・ミス・ロツタとミス・モンモランシの名誉に多大な傷をつけたでしょうに」

シエスタは両腕を腰に当てて、ギーシュに反論を行った。

「だいたい言っておきますけどね、貴族だからって何もかも自分の思い通りに事を運べると思ったら大間違いなんですよ。権力で黒を白にひっくり返せるなんて、物凄いインチキじゃないですか」

シエスタのこの言葉に、一部の生徒たちは共感を感じ、また別の生徒たちは反感を感じた。

「あのメイドの言うことにも一理あるよなあ。ギーシュ、いい加減罪を認めて投降しちまえよ!」

「そうだそうだ、お前のほうこそ悪いぞギーシュ!」

「何だあのメイドは、平民の分際で貴族に意見するなんて生意気じゃないか!」

「構うなギーシュ、その生意気な平民に躡けをしてやれ!」

シエスタの発言一つによって、あつという間にこの場の意見は真つ二つに分かれた。

先ほどまでは仲のよかつたはずの生徒たち同士でさえ、それぞれの支持する意見によって二つの陣営に分かれ、睨み合いを始める始末であつた。

「ちょっと、この状況はいつたい何なのよ!この修羅場はどういうことなの!」

睨み合いをはじめた生徒たちの間を縫って、騒ぎの元凶であるギーシュとシエスタの元に辿り着いたルイズ&才人。

「おや、キミはルイズとその使い魔君じゃないか……。ちようどいいや、キミたちにも事の顛末を話しておこうか」

事の顛末を聞いたルイズと才人は、完全に呆れかえっていた。

「被告人ギーシュ・有罪ね」

「決定的に有罪だな」

即答だつた。

「キミたちもボクが悪いって言うのかい!」

「当たり前でしょ!ミス・ロツタやモンモランシーの立場に私がなつていたら、即刻爆破しているところよ!」

同じ女として、制裁せずにおくべからず。女心を弄ばれるというのは、女にとつてはとても許せない事なのだ。

「くそう、どいつもこいつもボクに意見しやがって……!!おいそこのお前、決闘だ!!」

「……は？」

いきなり決闘宣言をされ、間の抜けた声しか出せない才人。

「いやいやいや、オレ全然関係ねえじゃんかよ。ほぼ傍観者であるオレが、何で決闘の相手として指名されにやいかん訳？」

「誰が意見していいと言った、平民? ……まあ理由を言っておこうか、ボクは女性を傷つけるつもりはない。それが、たとえボクに意見したルイズであってもね。それに彼女の家はトリスティンでも有数の貴族家、手を出したらタダじゃ済まないからね」

理由を聞かされ、再度呆れるルイズ。要するにギーシュはルイズ自身が怖いのではなく、ルイズの家が怖いのだ。

だから貴族ではない才人に決闘を挑み、打ち負かすことで溜まった鬱憤を晴らそうとしているというわけであった。まさにとばかり、いい迷惑である。

「……わかつたわかつた、決闘を受けるよ。今すぐここでやるのか？」

「まさか。貴族の集いの場であるアルヴィースの食堂をメチャクチャにしては、今後ここで二度と食事を頂けなくなってしまうからね。ヴェストリの広場、そこで決闘だ。……逃げるなよ」

そう告げるとギーシュは背中を向け、食堂から去っていった。

「お、おいお前……えらい因縁をつけられたなあ……。大丈夫か？」

才人に声をかけてきたのは、先ほどの授業で会ったマリコルヌだった。マリコルヌ自身は先のギーシュの意見に否定的な考えであったが、あまりにもギーシュの独善的な意見の前に押されて反論すら

ままならなかったのだ。

「心配してくれてるのか、ありがとうな。とりあえず行かないと、またあいつの機嫌を損ねちまう。そうなたら誰が止めればいいんだ？」

「そ、それは……。ミスタ・コルベルとかに頼めば……」
「ムリよ」

マリコルヌの提案を、ルイズは即座に一蹴した。

「生徒同士の争いに、先生たちが介入するとはとても思えないわ。あまりに度が過ぎている場合は話は別だと思うけど、今はまだそこまで行っていないってことでしょ。結局は今のところ、口喧嘩の域を過ぎてないじゃない」

「あつ……」

言われて、マリコルヌは気付く。先ほどまでの騒動は殆ど口で行われたことで、手を出したものは誰もいなかった。

決闘宣言もされたとはいえ、まだ開始には到っていない。

「へたに長引かせるよりは、さっさと決闘に応じて解決させたほうが早いとオレは見ている。相手は話し合いが通じそうにないから……そうだな……。今のギーシュは頭に血が上って、善悪の判断が希薄になっていだけなんだろうな。ボクからも頼む、あいつの目を覚まさせてやってくれ」

「後で罰則とがありそうな気もするけど、今は早期解決のほうが重要よね」

普段はふざけあつたりしたりと、そこそこ仲の良いギーシュとマリコルヌ。少なからず見知った間柄の人間が、これ以上墮ちていくのをマリコルヌは見えていたくなかった。

「任された。それじゃあ行ってくるか」

「私も行くわ、才人。ヴェストリの広場への案内と、観戦もしたいしね」

ルイズに先導されてヴェストリの広場へと向かう才人。その後を追うようにして、決闘に興味を持つ生徒たちもヴェストリの広場へ

と歩を進めていた。

魔法学院一日目・前編（後書き）

ついにはじまる決闘。

才人VSギーシュの決闘の行方はどうなるのか。

はたして才人は、ギーシュを正しい道に戻せるのだろうか？

1万PV突破記念回

今回のような、本編と無縁の回は台本形式になります。

サ・・・才人
ル・・・ルイズ

サ「おいルイズ、この小説のPVが1万突破したぜ!!!」

ル「PV・・・確かユニークアクセスだったわよね。なかなか凄い事じゃないの」

サ「だよなだよな!!!今回は記念回の特別編だぜ!!!」

~~~~~1万PV突破記念スペシャル~~~~~

ル「いきなりだけど、うちの作者って原作キチンと知ってるのかしら?元の話じゃとつくに出てきているはずのキュルケがまだ影も形も出てないんだけど」

サ「それなんだけどな。実は原作よりも二次作品のほうが比率が高いらしいぞ。ネットで探せば今や結構な数の二次作品が出てくるからな」

ル「インターネットの時代か・・・。いい時代になったものだ」

サ「何かお前のキャラがいつも以上に違くない?」

ル「何を今更、元々私は原作の『私』とは完全に異なるキャラになる予定なのよ。というかもう既に色々違ってきてるし」

サ「それもそうか。オレが魔人化した時点でもうとっくに原作乖離は始まってたんだよなあ」

ル「そういうことよ、今更気にしたら負けなんだから。あと一応言っておくけど、この作品では私からのツンデレは期待しないように」

サ「一番の萌え要素消滅!!??」

間。

サ「決闘本編ではどの武器を使おうかな・・・」

ル「んなモンあなたには必要ないでしょ!?!」

サ「いいじゃんかよ、一応ガンダールヴのルーンがあるんだから。せつかくあるモンは使わないと勿体無いぜ」

ル「そういう問題かしら・・・。それで、どんな武器を使う候補として考えているの?」

サ「第一候補はゼットソードだな」

ル「ああ、あのクソ重い剣ね……。でもあれって結構簡単に折れてなかったっけ？」

サ「ありゃあ斬ろうとした金属が規格外すぎただけだろ。まあ結果的には折れて正解だったようだけど」

ル「あんな秘密があるなんてそれこそ『聞いてねーよ』状態よね。それで第二候補は？」

サ「トランク스가使ってたビームサーベル」

ル「それって……。『超ドラゴンボールZ』からの！？随分とまあマイナーどころからネタを引っ張ってきたのね」

サ「スキルツリーを利用しないと持ち替え自体できないから、このゲームをやったことない人にはわからないネタかもな」

ル「というか、その武器を候補に入れた時点でアンタの武器の好みはつきりとわかったわ……。で、第三候補はあるの？」

サ「一撃必殺のスピリッツソードで」

ル「武器じゃねーわよそれは！！振るったらギーシュどころかギャラリー、果ては周辺地形までザックリ斬れるわー！！」

ル「さてと、名残惜しい気もしますがそろそろここで終わりにさせていただきますね」

サ「今後も『ゼロ魔人』を宜しくお願いします。それじゃ、今回はこれにてっ!!」

ル「またねー!!」

サ「そっぴゃ後で思い出したんだが、悟飯が子供時代に使ってた剣って手もあつたよなあ」

ル「マジで今更よね。というか別に剣で拘らなくてもいいんじゃないの？如意棒とかも再現できるだろうし」

サ「……………(汗)」

ル「本気で忘れてたのね……………」

- 終 -



## 1万PV突破記念回（後書き）

やっぱりこの形式の方が書きやすいことには書きやすいですが、小説としては

文面的に不向きではありませんね。

ー昨日初めて『ゼロラジ』をニコ動で聴いてみたのですが、才人とルイズの姿をしたまま喋っているイメージが強くてある意味爆笑しました。

（恐らく原因は表示されていた画像のせい）

## 魔法学院一日目・後編

「ヴェストリの広場にお集まりの諸君……。大変長らく待たせました！！これより決闘だ！！！」

ウオオオオオオツ！！！！！！

ヴェストリの広場に集結した生徒たちの歓声が、一挙に巻き起こった。先ほど意見の違いから対立していた生徒たちですら、歓声を挙げる者の中に含まれていた。

この現場が形成されていく様子を見ていた学院長付きの秘書、ミス・ロングビルは頭を抱えた。貴族の決闘は禁じられているはずなのに、何故止めるどころか観戦する生徒が次から次へと増えていくのだろうか？

近くの生徒に事情を聞いてみたロングビルは、ギーシュがこれから決闘を行う相手が貴族ではなく平民だからルールには反しないはずという回答にある意味納得してしまった。

確かに平民と貴族との決闘は規制対象には含まれていない。それどころか平民が貴族に逆らう事自体、ハルケギニア全体の慣習としてあつてはならない事態なのだが。

それからすぐに、ルイズが才人を引き連れてヴェストリの広場に姿を現した。

（へえ、あれがコルベールのオツサンが言ってた『ミス・ヴァリエールが召喚した人間』かい。しかしまたこりゃ、相当の騒ぎになったもんだねえ……。あの爺さんには一応報告したほうが良さそうだね）

決闘の相手となる人物を確認したロングビルは、速やかにその場

を立ち去り学院長室へと事態の報告に向かったのだった。

「よく逃げずに来たな、使い魔君。そして案内ご苦労だった、ミス・ヴァリエール」

「ま、この程度ならどうってことないわよ。それで、ホントに決闘やるつもりなの？ 貴族対平民の決闘は、確かに規則の範囲外だけだよ」

「当然じゃないか、僕は前言撤回するつもりはない。さすがに時間を置いたから少しは頭が冷えたけど、自分の言った言葉に責任を持ってない人間にはなりたくないんだよ」

「・・・結構意固地ね、アンタ」

一応の説得を試みたルイズだったが、ギーシュの返答からもう説得は無理だとはつきり理解してしまった。溜め息をつき、自分もこの状況に関わる一人としてそれなりの事はするべきだと結論を出した。

「しょうがないわ、なら私がこの決闘の審判を行うわ。勝敗はどちらかが完全に戦闘不能状態になるか、降参をするか。そして戦法は双方共に、持ちうる全ての手段を使っても良し・・・それでいいわね？」

「わかった」

才人とギーシュが同時に了承の意思を示したことを見届けたルイズは、その場で杖を持った手を振り上げて宣言した。

「それでは・・・サイト・ヒラガ対ギーシュ・ド・グラモンの決闘！！はじめ~~~~~~~~っ！！！！！！」

ドオオオオンッ！！！！

誰もいない空めがけて発動させた爆発が、決闘開始の合図となった。

ルイズの同級生であり、代々家系的にいがみ合ってきたツエルプ  
トー家の令嬢・キュルケは学院に入って出来た親友・タバサと共に  
始まったばかりの決闘を観戦していた。

「噂には上ってたけど、本当にヴァリエールったら人間を召喚した  
のね。しかも結構親密みたいだし」

「主人と使い魔の仲が良いのはいい事。でも彼はきちんと戦えるの  
か気になる」

キュルケはルイズが呼び出した『使い魔』としての才人を観察し、  
タバサは才人が戦える人物であるかに重点を置いて観察していた。

開始の合図と共にギーシュは才人から距離を置き、素早く詠唱を  
行って自らの目の前に戦闘人形・ワルキューレを生み出した。

「僕はメイジだから、直接戦闘はハッキリ言って不向きだ。だから  
僕は自らの戦力であるこの『ワルキューレ』を使ってキミの相手を  
させてもらおう。・・・さあ、行け！！」

生み出されたワルキューレはギーシュからの指令を魔力によって  
受け取り、まっすぐ才人めがけて突撃を開始した。対する才人は右  
手を空に向けて広げたかと思うと、次の瞬間には一振りのロングソ  
ードが出現していた。

出現したロングソードをしっかりと両手で握り締め、近づいてく  
るワルキューレに向かって振り下ろす才人。ワルキューレはその一  
撃を受けて真っ二つにされ、その場で崩れ落ちた。

「は、はは・・・な、何だよその剣は！？一撃でワルキューレを  
倒せるなんて、とんでもない代物じゃないか！！是非、その剣の銘  
を教えてくれないか！！」

「いいぜ、教えてやるよ。この剣の名はゼットソード、見た目とは  
裏腹に凄まじいまでの重量を持つ剣だ。現にオレも、両手でないと

「まともには扱いきれん」

剣の銘を明かし、再びゼットソードを構えなおす才人。一方ゼットソードの威力を知ってしまったギーシュは、更に距離を離して再びワルキューレを生成。今度は複数体が同時に生成された。

「さあ、今度はその剣も届かないはずだ！こっちは武装を変更することによって遠距離にも対応可能だぞ、どうする？」

距離の有利性を更に高めたギーシュは、生成を立て続けに行つたことによつて自然と流れ出てきた汗を拭いながらも勝ち誇つた笑みを浮かべていた。接近戦では絶対的に不利なのがわかつた以上、相手を自分の元に近づけさせない戦法に切り替えたのだ。

「しょうがねえな、ならオレも少し手の内を見せるか。くれぐれも巻き添えを食らつて死ぬんじゃないぞ？」

才人はゼットソードを地面に突き刺し、両手を硬く握り締めて腰を落とした。

「いったい、何をやる気なのかしら才人は？あのくらいの相手、ちよつと懐に飛び込んでしまえば即カタがつくはずなのに」

審判をしつつも、才人の行動に一抹の疑問を感じたルイズ。だが、すぐにその疑問は解消されることとなつた。才人が口から何か、白いものを吐き出したのを見て答えがわかつたからだ。

「あああら、ギーシュ死んだわねコレじゃ。それにしても才人も人が悪いものね、あの世への道先案内人をわざわざ作るなんて」

才人が口から吐き出したもの、それは才人の顔をしたオバケだつた。それも一体だけではない、四体もいたのだ。

「な、何だいソレは！！？？ま、ままままままさか・・・幽霊！！？？」

「ご名答だ、さあ行けオバケたち！！あいつらをオバケの世界にご招待してやれ！！」

才人の号令に従い、四体の才人ゴーストがワルキューレの群れと

ギーシュに突撃。ギーシュは咄嗟にワルキューレたちを盾にして身を守る判断を下したが、判断した直後に激しい爆発がギーシュの身を襲った。

「うわあああああつ！！！！」

その爆風は普段見慣れているルイズの爆発魔法よりも格段に規模が大きく、ワルキューレたちはあつという間に全員バラバラに砕け散り、ギーシュ本人も観衆となつている生徒たちを大きく飛び越えて学院の壁に叩きつけられた。ギーシュが激突した壁には固定化の魔法がかかっていたが、それでもなお壁にヒビが入っていた。

「な、何よ今のは……。どう思うタバサ……。!?」

目の前の状況が信じられず、完全に呆気にとられていたキュルケ。隣で観戦しているタバサに声を掛けたキュルケは、そこで立つたまま意識を手放し気絶しているタバサの姿を見つけた。

「ちよつと、タバサ!? タバサ~~~~!! 一人で勝手に現実から離脱しないで、戻ってきなさいつての!!!」

涙目になりながらタバサの肩を掴んで揺らしたり、頬を軽く叩いたりしてタバサの復帰を試みるキュルケ。だが生憎と、簡単にはタバサは復帰しなかった。

背中から壁に叩きつけられたギーシュは、全身を襲う痛みを耐えながら立ち上がるうとしていた。幸いなことに爆発そのものはワルキューレが食らってくれたため、ギーシュ本人へのダメージはそれほど酷くない。

その後壁に叩きつけられた追撃ダメージの方が、よほど大きいくらいだ。

「くそつ、まさかあんな攻撃をしてくるなんて……。あんなんじやとても勝てそうにはないな……」

貴族としては屈辱的ではあるが、もはや降参するしかなさそうだ。

後はどうやって自らの面子を保ちつつ降参するか、そう考えていた矢先の事だった。

「ようっ」

不意に、声が掛けられた。はっとなつて頭を上げたギーシュは、目の前の光景に空いた口が塞がらなかった。

何故なら

目の前に

才人が

いたのだから……。

「そ、そんな馬鹿な……！！いつの間ここに……！」

あの場所から結構な距離はあつたはず、おまけに観衆が大勢いたのだからここに辿り着くにはそれなりの時間がかかるはずだ。

「残念ながら企業秘密だ。それよりどうするんだ、まだやる気か？」

両手をボキボキと鳴らし、まだまだ戦えるということアピールする才人。ギーシュはそれを見た時点で僅かばかり残っていた立ち向かう心を砕かれ、降参するのであつた。

「あら、終わったみたいね。聞くまでもないとは思うけど、どっちが勝つたのかしら？」

「うわわっ、キミもいつの間に来たんだ！？それに質問する事そのものが、意地が悪いな。誰の目から見ても勝敗は明らかだろう？」

「ふふっ、まあそうよね。それじゃあ才人が決闘に勝利したことを知らせてくるわ。二人はそこらへんで適当にやってて」

ギーシュと才人の所在を確認したルイズは、広場に戻り才人の勝

利と決闘の終結を宣言。

広場から教室に戻っていく生徒たちの心には、「あの平民を敵にしたら絶対死ぬ！」という思いが深く胸に刻み込まれた。

学院の院長室では、遠見の鏡を使って決闘の様子を見ていた学院長・オスマンとロングビルが驚きを隠せずにいた。

「彼・・・勝ってしまいましたね・・・」

「うむ、物凄くあっさりとな・・・。下手をしたらあの剣や幽霊のようなものを使わずとも、己の肉体のみで勝っていたかもしれん」

「そんな馬鹿な、と言えそうにないのがまた怖いですよね・・・。ですがあの驚異的な強さは、必ずやメイジにとって脅威となります。今のうちに王宮に報告をなさっては？」

「いや・・・それはいかん。あれほどの強さを持つのだ、所在が知れ渡れば必ずや戦争の道具として使われようぞ。今のハルケギニアは多少の小競り合いはあれど、大局的に見ればまだ均衡は保たれている状態じゃ。そこへ彼を戦争の道具として投下すればどうなると思っ？」

「・・・確実に、国家間のバランスが崩れますね。そのままなし崩し的に全国家が戦争態勢に突入することでしょう・・・」

均衡を確実に崩せるだけの力を、才人は有している。ロングビルもオスマンも、そう判断していた。

「とにかく、この事は王宮には絶対に知らせてはならん。知れ渡れば彼のみならず、彼を召喚したミス・ヴァリエール、果てはヴァリエール家にまで迷惑が及ぶからのう」

「はい、私からもミス・ヴァリエールには伝えておきます。彼女は王家に近い血統と聞いておりますので、我々が対策を講じていても彼女経由で王宮に事が漏れる可能性もありますしね」

「うむ、頼むぞ」

ロングビルは一礼し、院長室を去っていった。



「さてはて、とんでもない事になってきたのう……。このハルケ  
ギニアの未来はどうなるんじゃないだろうか」

人間以外の腹の中もきつと黒い(前書き)

今回はちょっと短めです。というかタイトルがカオス。

## 人間以外の腹の中もきつと黒い

決闘を終えた後、ギーシュはアルヴィーズの食堂にてシエスタ・ケティ・モンモランシーの三名に謝罪。だがあそこまで騒ぎが大きくなった以上はただで事が済むはずもなく、景気のいい平手打ちの音が三連続で食堂に鳴り響いた。

ケティとモンモランシーはすぐに食堂を去り、シエスタは仕事に戻る。後に残されたのは、両頬が真っ赤に腫れ上がったギーシュの哀れな姿だった。

様子を見ていた才人は、同じ男としてギーシュに若干の哀れみを感じたものの、結局はそのまま放置することにした。痛い目に遭ったことだ、今後は同じような事は起こさないだろうと思いつつ。

その日の夜、才人はルイズの自室に戻ろうとしていた矢先にズボンを何かに引っ張られるのを感じた。よく見ると、赤いトカゲのような生き物が必死に才人のズボンを引っ張っている。

「どうしたんだ、オレに何か用でもあるのか？オレはそろそろルイズの部屋に戻りたいんだけどな・・・」

「きゆるきゆる、きゆるる〜!!」

「・・・何言ってるんだか、さっぱりわかんね・・・」

いかに声（本人にとっては）のつもりでも、他人に理解されなかつたらそれはただの『音』ではない。才人はフレイルムがズボンを引っ張るのにも構わず、そのままルイズの部屋へと戻ってきた。

「おーい、今帰ったぞ。これ、土産な」

ノックもなしに部屋の扉を開き、足元で必死にズボンを引っ張り続けるフレイルムを指差す。

「あ、おかえり才人。・・・って、何その生き物・・・」

才人の足元で必死に頑張っているフレイルムを見て、少し驚くルイ

ズ。フレイムを才人のズボンから引き剥がして抱き上げると、今度は暴れ始めた。

「あらあら、そんなに暴れちゃーよ。この子、もしかしたら昨日の儀式で誰かが呼び出した使い魔かもしれないわ。そうでなかったら、こんなところに火トカゲがいるはずないもの」

「誰かの使い魔か……。このまま待つていたら、ご主人様が引き取りに来るかな？」

「多分来ると思うわよ。それまでの間、部屋の中で遊んでましょ！実はいつ才人が戻ってきててもいいように、遊ぶ道具を用意していたのよ」

フレイムを降ろして部屋の中央に進むルイズと、それを後ろから追う才人、そんな二人についていくフレイム。机の上に置いてあった『遊び道具』を才人に見せたとき、彼の顔がギョツとなったのをルイズは見逃さず、彼女は一瞬ニヤリとした。

「お、おいおい……。これってヨーヨーじゃないか！どこからこんなの手に入れて来たんだ！？」

「ふふん、入手ルートはナイショよ。さっきまで一人で練習してたんだけど、結構コレ難しいわね……。一回身体に絡まって動けなくなっただもの」

「オイ！？そんな失敗例聞いたことないぞ！！」  
身体に絡まって動けなくなるほど、紐の長いヨーヨーがあるというのか。いや、きつとここにあるということだろう。

「あーもう、フレイムったら遅いわねえ……。しかもどうなってるのよ、あの子との視覚・聴覚リンクが切れてるし」

フレイムがなかなか帰ってこない事と、フレイムとの間に繋がっていたリンクが突然切れた事に異常を感じたキュルケは、部屋を出てフレイムを探しに行くことにした。

扉を開いて一歩外に踏み出そうとした次の瞬間。

「わーお、キュルケさんお出かけですか〜??何ならボクも一緒に!!!」

何か待ち伏せされていた。突然の事だったので杖を取り出すことも忘れ、キュルケは待ち伏せを行っていた生徒に反射的に裏拳を叩き込み、その場に気絶させてしまった。

「あ、やつちゃった・・・」

つい咄嗟に手が出てしまったが、もう遅い。ごめんねと呟きながら、その場を立ち去るキュルケ。

「フレ임にはヴァリエールの使い魔を呼びに行かせたから、あの子の部屋に行けばきつと会えるはず!!!待ってなさいフレ임、今迎えに行くからね!!!」

愛すべき使い魔・フレ임と再会するために動き出すキュルケ。

その頃フレ임はというと、ヨーヨーの紐を使った縄跳びに懸命に挑んでいた。

「きゅるっ、きゅるっ、きゅる!!! きゅるっ、きゅるっ、きゅる!!!」

一定間隔で足元に迫る紐を、絶妙のタイミングでジャンプし飛び越える。この感覚に、フレ임はすっかりハマってしまっていた。

「あははっ、この子頑張るー。縄跳びをする火トカゲなんてどこを探してもいないわねきつと!!!」

「寧ろ他にいてたまるか・・・」

最初はほんの冗談のつもりで勧めたのだが、いつの間にかフレ임本人がやる気になってしまい、今では記録を伸ばそうと躍起になっているフレ임の姿がこの部屋にはあった。

「さあ、そろそろ難易度アップの二重跳び行くわよ!!!」

「きゅるっ!!!???」

突然の難易度アップ宣言に、驚きの表情を浮かべるフレ임。や

つと慣れてきた矢先に突然難易度が上がるときたものだ、驚かない  
ほうがおかしいくらいだ。

Bannon! !

「フレイルムっ、ここにいるの! ?」

いきなり扉が開かれ、盛大にキュルケがルイズの部屋に侵入した。  
「わっ、びっくりさせないでよツエルプストー! ! . . . っ、フ  
レイルム? もしかしてこの火トカゲの主人ってあんたなの?」

「そうよ! ! ヴァリエール、あんたの使い魔をあたしの部屋にご招  
待しようと思つてフレイルムを迎えに行かせたのに、フレイルムは全然  
戻つてこないしリンクは切れるし! ! もう散々だったんだからね!  
!」

「ふん . . . 。 ってちょっと待ちな、今聞き捨てならない台詞が  
含まれていたような . . . 。 才人を招待するつもりだったって、ど  
ういうつもり?」

キュルケの発言の中に、聞き捨てならない台詞が含まれていたこ  
とを知つたルイズの身体から殺気が溢れ始めた。

「あら、別にいいじゃないの誰を招待したって。 あたしはその人  
に興味湧いたのよ、今日の決闘を見ていたときからね。 ほーらフ  
レイルム、お迎えに来たわよ」

「きゆる、きゆる! ! きゆる . . . ! !」

ようやく主人と再会できたフレイルムは縄跳びの有効範囲から逃げ  
出し、キュルケの胸元に飛びついた。

「あらあら、フレイルムつたら . . . 。 ってちょっと、この子泣いて  
るじゃないの! ! いったい今までこの子に何をさせていたのよあな  
たたち! ?」

「なあルイズ、このキュルケって人……。何と言うか、母親っぽい雰囲気があるんだが」

「奇遇ね、私もそう思っていたところよ。使い魔に対してはああいう一面を見せるのね、意外だったわ」

才人にとつては第一印象、ルイズにとつては意外なキュルケの一面を目の当たりにした。当のキュルケは現在、今にも泣き出しそうなフレ임을あやしていた。ルイズが放ち始めた殺気は、キュルケの意外な一面を目の当たりにしたことで既に消えていた。

「……………」

才人は何かを思ったのか、キュルケに抱きついているフレイムの頭に手を置いてじっとし始めた。

「ちよつと、どうなさったの？そんなうちのフレイムが珍しいのかしら？」

声を掛けるキュルケに構わず、才人はフレイムの頭に触れ続ける。そしてだんだん、表情が険しいものへと変化していった。

「このエロトカゲめ……。聞いて驚くなよ二人とも、コイツはキュルケの胸元で泣き続けるフリをしてエロい事考えてやがったぞ」  
フレイムの思考を読み取り、その結果を呆れながらルイズとキュルケに伝える才人。こんな思考をするあたり、間違いなくこの火トカゲはオスだろう。

「フリーイーム……………っ！！！！！！」

「きゆるう……………っ！！！！！！」

怒鳴り声を挙げられたフレイムは身の危険を感じ取り、キュルケの胸元から素早く逃走・そのままルイズの部屋から出て行ってしまった。

「あつ、この！！待ちなさーいっ！！」

フレイムを追いかけて、ルイズの部屋からドタドタと退室してい

くキュルケ。一連の様子を、ルイズは呆然とした様子で見ている。

「何、このドタバタ……。普段のツエルプストーなら、自分から男を部屋に招いて色仕掛けするくらいなのに……」

「それだけフレイムのことを純粹に可愛がっていたんだろうな。なのにフレイムに邪な考えがあることがわかつちまった……。そりゃあシヨックも大きいだろうよ」

うんうん、と頷きながらしみじみと語る才人。

「というかあんたが思考読まなかったらこの状況になることもなかったんじゃない？」

「あ、そうだった！！とは言ってもなあ、言葉が通じない相手とコミュニケーション取るには思考でも読むしかないじゃないか」

「プレイバシーも何もないわよ、それは！！」

こうして、魔法学院の夜は騒がしくも更けていくのだった……。



**魔剣の出番は一度きり！(前書き)**

今回も短めです。結局10日くらいブランクできてしまいました。

## 魔剣の出番は一度きり！

ギーシュとの決闘から数日後、才人がハルケギニアに来てからはじめての休日・虚無の日。この日才人はルイズに誘われてトリステイン王国の王都・トリスタニアにやってきていた。

それまでの期間のうちにルイズは何回か地球へと訪れており、その都度地球とハルケギニアとの文明の格差に驚いていた。今回はその返礼とばかりに、トリステインの中心を見てもらおうと考えたのだ。

肝心の移動手段は、ルイズの記憶を辿って瞬間移動で一瞬である。

「ここがトリステイン王国の中心、トリスタニアよ。はじめてこの国の首都に来た感想はいかがかしら？」

周囲を見回し、トリスタニアの外観をざっと見る才人。そしてすくなく鼻をつまんだ。

「何か、すっげー臭うんだが…。街の表面は華やかな感じが確かにするけど、裏側からそういうった感じの臭いが漂ってきてるんだ」

「ああ、そういえば…結構な嗅覚を身につけているんだったわね…。ここではそれが思いつきりアダになったみたいね」

「うう、鼻がバカになりそうだ…。早くどこかの建物に入ろうぜ」  
トリスタニアの観光もそこそこに、ルイズが先導して適当な建物に入った。中に入るとそこには剣・槍・杖・斧などの武器の数々。どうやら才人たちは武器屋へと入ったようだ。

「おお、これはこれは貴族のお嬢様！ウチは真つ当な商売をしておりやすぜ！！それとも、何かご入用でしょうか？」

「ま、まあ一応ね…。少し商品を見せていただいていいかしら、私の連れ用に何か買いたいと思うのよ」

それならば、と店の奥に駆け込んでいく武器屋の主人。先ほどの

会話を聞いていた才人は、すかさずルイズに尋ねた。

「なあ、何で何か買いたいなんて言ったんだ？オレにはゼットソードがあるから別にいらないけど…」

「何バカな事言ってるのよ、ゼットソードは強すぎてかえって目立つじゃないの！！それに万が一壊れた場合、中からスケベジジイが出てきたりなんかしたらどうすんのよ！！」

「剣の中には誰もいないと思うけどなあ。でも買ってくれるってんなら、オレは遠慮しねえぜ？」

武器のプレゼントを貰えるということがわかると、遠慮なくいたたく姿勢となった才人。それを見てルイズは、「そんなに他人の金で買ってもらうのって魅力的なのかしら…」と内心思っていた。

それから数分後、店の奥から大量の武器を抱えて店主が戻ってきた。

「待たせたなあ、お客さんたち！！この中から好きな武器を選んでくれ、何なら全てお買い上げでも構わんぞ！！」

足元に無造作に置かれた大量の武器。実用性とかそんなのは全く関係なしに、ただ単に数を揃えてきただけのようにだった。

「こんなにいるかっ！！多すぎるぞ！！」

あんまりな状況に、思わず怒鳴ってしまう才人。

「えー、だって最近買ってくれるお客さん全然いないし…。貴族様ならお金いっぱい持つてるだろうから、これくらいの武器なら一気にまとめて大人買いしてくれるだろうと思って」

「あんだ、貴族を何だと思ってるのよ…。貴族と一息に言っても、資産の少ない貴族と大きい貴族とで結構差があるのよ」

「またまたあ、そんなご冗談を。屋敷のインテリアの一環として、是非ともお買い上げを…。ちなみにお代は3万エキュールになります」

ブチッ

「高すぎるにも程があるわー！ー！ー！ー！！！！！！」

強引な売りつけ＆値段の高さにキレたルイズは一時的に左腰へと右手を移動させ、左手をそえるような体勢を取った。数秒後には左手をそえたままの右手を大量の武器めがけて突き出し、次の瞬間には大量の武器は閃光と共に跡形もなく消し飛んだ。

さらに武器屋の床には底が見えないほどの大穴が空いていた。

「なっ、なななな何を…」

突然の出来事に目を白黒させ、目の前の状況が理解できない武器屋の主人。それに対しルイズは、先ほどとはうって変わってにこやかに答えた。

「あらオジサマ、甘い夢からはお目覚めかしら？人様をポツタクルうとするような悪逆非道な武器は、たった今跡形もなく消し去っておきましたのでご安心を。きつとオジサマはあれらの武器が放つ魔性の力に中てられて、思考がおかしくなっていたのですわ」

何の罪悪感も持たない純粹な笑みを見せつけられ、武器屋の主人は反論する気力も失せてしまっていた。商品の値段に不満を持ち、商品に当たり散らす貴族はこれまでに何人もいたが、ここまでやる貴族は前例がない。

弁償を要求しようと口を開き、声を出そうとしてはいたのだがその声が全く出てこない。彼の脳が訴えているのだ、反論したら跡形もなく消されると。

ガチガチガチ…

そんなとき、店の奥で不意に何か音が聞こえた。気になった才人が様子を見に行くと、そこには一振りの剣が置いてあった。よく目を凝らして見てみると、なんとその剣そのものがガチガチと音を立てて震えているではないか。

「何だこりゃ？剣がガチガチ震えてやがる…」

不思議に思った才人は、剣が震えるのも構わずに左手で剣をしっ

かりと握り締めた。その途端、ガンダールヴのルーンが強く浮かび上がり、光を放つ。

「うひょーっ、この感じは紛れもない『使い手』の感覚じゃねえか！！ポウズ、おめえが今代の『使い手』なんだな！！」

先ほどまでの震えはどこへやら、『使い手』の感覚を感じたと同じ時に歓喜する謎の剣。

「俺様の名はデルフリンガー、意思を持った剣・インテリジェンスソードの一つだ！！俺様はずっと待っていたんだよ、『使い手』の手に渡るときを！！さあ相棒、俺様を買ってくれ！！」

一人（？）で勝手に盛り上がり、捲くし立てるデルフリンガーを前にして才人は何が何だかわからなくなっていた。デルフリンガーとルーンを交互に見やり、最終的にはルイズに視線を向けた。非常に困ったような表情で…。

「どうしような、この喋る剣…。しかも腕に吸い付くように、柄から離れてくれねえし」

才人はデルフリンガーを腕から離そうとしているのだが、肝心のデルフリンガーが何かしているらしく全く離れる気配がない。

ルイズも少し汗をかきながら考え、一つの答えを考え出した。

「しょうがないわ、ここはその剣の要望通りに購入しましょう。買わないといつまでも才人から離れてくれそうにないし」

デルフリンガーの要求にルイズが折れ、購入することによってようやく才人は解放された。余談だが、購入費用は10エキューだったという。

その後才人の日用服など、生活に必要な品々を購入した後ルイズと才人は学院へと戻った。

学院へと戻った才人とルイズは、喋り続けるデルフリンガーに辟易としていた。とにかくよく喋る剣で、全く二人の事情を介さないのが始末に悪い。

「…才人…」

「…おう…。ヤルわ、もう…」

我慢の限界を迎えたルイズと才人は結託し、デルフリンガーを強制的に鞘に収める。ルイズはデルフリンガーを軽く空に投げ上げ、才人はデルフリンガーへと掌を向けた。

「アメ玉になれっ！！！」

叫び声と共に発せられたピンク色の光線がデルフリンガーを直撃すると、たちまちのうちにデルフリンガーはアメ玉へと姿を変え、ころりと才人の手の中で転がった。

「こりゃ美味しそくないちごキャンディーだな。ルイズ、これ食べるか？」

「やーよ、それ元はあの喋る剣でしょ？食べたら取り憑かれそうよ」  
さすがに、元ネタがわかってしまっているお菓子を食する勇氣はルイズにはなかったようだ。

数分後、たまたま近くを通りかかったマリコルヌにいちごキャンディーは手渡され、彼の胃袋にいちごキャンディーは収まった。

**魔剣の出番は一度きり！（後書き）**

まさかのデルフ処分ルートとなりました。

そして食ってしまったマリコルヌの今後はいかに。

ルイズは「ギャリック砲」を覚えました。

若きメイジの意地！見せる貴族の根性！！（前書き）

今回はいよいよフーケ編に入ります。



若きメイジの意地！見せる貴族の根性！！

魔法学院に戻りデルフリンガーを処分したあと、部屋に戻ろうとした才人はふと足を止めた。

「どうしたの？」

「いや、何かひそひそと話す声が聞こえてな。この声はキュルケって人も含まれてるな」

キュルケが？と疑問を抱くルイズを背に、その場で待ち構える才人。少し待っていると、キュルケが何も知らずにこっちへとやって来た。

「あら、こんなところでお揃いで。さっきあなたたちの部屋を訪ねただけど留守だったから、少しタバサとお話してたのよ。ね、タバサ？」

「……」（涙目で顔を横に振っている）

キュルケからタバサを紹介された才人だったが、対面直後に涙目をされて少し戸惑っていた。

「何か、この子を泣かせるような真似をしたかオレ？」

キュルケやルイズに尋ねてみるものの、苦笑するような表情を返されてますます回答には遠くなってしまった。どうしたものかと思つた才人だったが、突如として才人の頬に大きな杖が押し当てられた。

「あなた…先日の決闘でオバケ吐き出した…。もう同じことはしないで……」

涙目を通り越し、完全に泣いていながらも才人に要求を突きつけるタバサ。目つきは真剣そのもので、本気の訴えであることが才人にも理解できた。

「オバケ…ああ、スーパーゴーストカミカゼアタックの事か。ありや本物のオバケじゃねえんだけどな……」

「本物とか、偽者とか関係ない。私はオバケそのものがダメ……」

言いたいことを全て言い終えたタバサは押し当てていた杖を放し、背中に杖を戻した。

「あんまり見た目に悪い技は使わないほうがいいみたいね、才人。ところでタバサ、あなた…どうやってそんな大きな杖を背負っていても平然としているの…」

杖は材質にもよるが、長ければそれだけ重量が増すケースが殆どだ。身の丈と同等かそれ以上はありそうな杖を背負ってもなお、機敏な動作ができるタバサを見てルイズは興味を抱いた。

「…秘密。でも鍛えてる、それだけは教えとく」

マントで涙を拭いつつ、言葉短かに返答をするタバサ。どうやらタバサという人物は、あまり口数が多い女の子ではないようだ。

「ところで二人とも、私たちに何か用事でもあるの？そろそろ部屋に帰ろうと思ってただけ…」

その言葉を待ってましたとばかりに、キュルケは背中にまわしていた何かの包みを取り出し、梱包を開いた。

「じゃじゃ〜ん、今日トリスタニアで買ってきたのよこの剣！！原価9割引きという、とてもお買い得な値段だったから衝動買いしちゃうったわ！！」

購入元を知った途端、才人とルイズの表情が一気に陰った。何せそこは今日、散々に営業妨害した店だったからだ。

「へ、へえ〜…。9割引なんて大胆ねえ…」

「そうなのよ、何でも今月いっぱい店を畳むらしくてね。在庫を抱えていてもどうしようもないから、腹を切る覚悟で全部売って妙に息巻いてたわよ」

「随分と思いつた事をする店もあるもんだなあ」

出来るだけ人事のように話し、関わった事を悟られないようにする才人とルイズ。幸いとも言うべきか、キュルケもタバサも気付かなかったたようでこれ以上の言及はなかった。

「で、その剣がどうしたっていうのよ？まさかその剣をキュルケがタバサが使うわけじゃないでしょうね」

ハルケギニアでは、剣などの武器は平民が使うものだとして貴族たちは使うことを好まない。稀に剣などの武器を模した杖があるが、やはり貴族としてのメインは魔法であることに変わりはないのだ。

「そうねえ、あたしが使ってもいいけど…そっちの彼に使ってもらおうと思って買ってきたのよ。この間の決闘のときに凄い剣使ってたみたいけど、あれつきりみたいじゃない？もしかして壊れたのかしら？」

「いんや、別に壊れたりしちゃいねえぞ。常時持ち歩くには重過ぎるから、必要なとき以外は異次元空間に収納してるんだ。…って、異次元空間ってわかるか？」

「わからない」

キュルケとタバサは即答、ルイズはあえて回答しなかった。

「まあ、その説明は置いておくとしてだ。キュルケ、何でオレに剣を買い与えようと思ったんだ？」

「だって、あなた相当強いじゃない。それに最近ではトリステイン全域を荒らしまわっている盗賊『土くれのフーケ』ってのがいて色々と物騒なのよ。この剣でフーケが現れても、あたしを守ってほしいってわけ」

まるで媚を売るかのような目で、才人にアプローチをかけるキュルケ。それに気が付いたルイズは目つきを鋭くして睨みつけようとしたが、咄嗟に思いとどまった。一応、才人に剣を渡す理屈の半分は通っているのだから。

「土くれのフーケ、ねえ…変な二つ名だな。そいつの手口とか、特徴はわかるのか？」

「犯行するときには必ずゴーレムが出てくる。物凄く大きくて、並大抵のメイジではそのゴーレムに傷一つつけられない」

「ああんもう、タバサったら！！あたしの説明奪っちゃイヤよ！！  
…コホン、ゴーレムってのはこの前の決闘でギーシュが呼び出した

ワルキューレと殆ど同種よ。フーケのほうがギーシュよりも遙かに格上だから、呼び出せるゴーレムの大きさも30メートルは超えるって専らの噂よ」

タバサとキュルケ、二人がかりの説明を聞いて才人はだいたい把握した。そんじょそこらのメイジでは歯が立たず、国ぐるみで対処を迫られているほどの相手と判断。

「あとね、犯行現場には魔法でサインを残していくんだって。自己顕示欲が強いのかしら？」

思い出したようにルイズが、フーケの特徴を追加で述べる。

「うーん、確かに妙だな。ゴーレムで乗り込んだ時点で大抵の場合はフーケの犯行ってわかるのに、さらにサインを残していくとは…。サインなしなら模倣犯のしわざとかに出来そうな気がするんだよな」

「何だかんだ言ってメイジは自尊心の強い者が多い。偽者が出たりするのを防ぐためなのかもしれない」

「あ、なるほどな」

タバサの発言に、納得のいったような表情になる才人。

ドガアアアアン！！！！

そんな矢先であった、学院の敷地内で物凄い轟音がしたのは。轟音と共に大地が揺れ、キュルケは体勢を崩して転等してしまう。

「な、なななな…何なの今の地響きは！？」

キュルケが身体を起こし上を見上げたとき、そこには巨大なゴーレムがのしのしとこちらに向かってのし歩いていた。そしてゴーレムの肩には、全身をマントで覆い隠した謎の人物が。

「まさか…フーケ…！？」

タバサが小さく呟く。それをまるで肯定するかのように、ゴーレムは大きな足を持ち上げて才人たちを踏み潰しにかかってきた。

「危ないわ、才人!!」

ルイズが思わず叫ぶ。いくら強大な戦闘力を持つ才人とはいえ、超重量を誇るゴーレムに踏まれればただでは済まないはず。現にルイズは才人の強さのことなど完全に頭から放り出し、咄嗟に叫んでいた。

だが肝心の才人はそこから一步も動かず、逆に両手を広げてフーケのゴーレムの足を受け止めようとしていた。

「ヴァリエール、あなただけでも早く逃げなさい!!彼は言っても聞きそうにないわよ!!」

キュルケが怒鳴るようにルイズに命じ、ルイズはそれを黙って聞き入れた。そしてゆっくりとフーケのゴーレムが才人を踏み潰しにかかり…

ズウウウウン……

才人の身体は、完全にゴーレムの下敷きとなった。

「さ、才人…!!」

才人を踏み潰したゴーレムは、そのまま目の壁に向かって拳を振り上げた。

奇しくもそこは以前の決闘でギーシュが背中からぶつかった位置であり、よりにもよって学院の宝物庫の壁だったのだ。なお、学院内の建物全てには例外なく固定化の魔法がかけてある。つまり才人の一撃を食らって吹っ飛ばされたギーシュは、生身で固定化の魔法を貫きかけたダメージを与えていたということになるのだ。

「まずいわ、タバサ、ヴァリエール!!フーケは宝物庫を破ろうとしているのよ!!」

「何ですって!!」

「…止めましょう。できるかどうかはわからないけど」

ルイズは即座に杖を構え、宝物庫めがけて振り下ろされようとしているゴーレムの拳めがけて魔法を放つ。どの道爆発するので何でも良い、ただ威力さえあれば。

そんな思いが通じたのか、拳が壁に到達する直前でゴーレムの拳は木っ端微塵に砕け散った。だが、即座に拳は再生されてしまう。

「術者の精神力がある限り、ゴーレムは何回でも再生する…」

「ちっ、同じことばかりやってると逆にジリ貧になりそうね!!」  
せつかくの攻撃の成果を無に返され、舌打ちしてしまうルイズ。

「けれど敵に一番ダメージを与えられるのはヴァリエール、あんたの爆発魔法よ。あたしとタバサが足止めをするから、ここ一番の爆発でアイツを跡形もなく消してやりなさい!!」

「私たちが時間を稼ぐ。どこまで耐えられるかはわからないけど…」

「二人とも…!!ありがとう、少しの間お願いね!!」

ルイズはキュルケとタバサに時間稼ぎを任せ、自分は若干離れた場所に移動。杖を握ったまま両腕を交差させて振り下ろし、握り拳を作って腰を落とす。

「やああああ…!!っ!!」

桃色の髪とマントが風もないのに揺らぎ始め、次第に揺れが激しくなっていく。今は誰も目にはいる者はいないが、その身体からは桃色のオーラが少しずつ立ち昇り、どんどん大きくなっていった。

「タバサ、壁が危ないわよ!!」

ゴーレムの強烈なパンチが、宝物庫の壁めがけて再び迫っていった。

「エア・ハンマー!!」

タバサは少しの間溜めていた精神力を解き放ち、エア・ハンマーの魔法でゴーレムの拳を壁から別の方角に向けさせる。

「キュルケ!!」

拳はキュルケに向けられ、無理矢理方角を変えられた影響からか  
とてつもないスピードで迫っていた。

「やば…」

自分に拳が向かってくるとは思ってもいなかったキュルケは、  
ても魔法は間に合わない判断。背負っていた剣に手を伸ばし、鞘  
に収めたままの剣を自分の前に突き出すことで盾代わりにした。

だがその程度で防御になるはずもなく、キュルケは剣もろともゴ  
ーレムの拳をまともに食らい、吹っ飛ばされて背後の木に激突する。  
そのままキュルケは木の根元にずり落ち、気絶してしまう。

「…よくも、キュルケを…あのゴーレムは、必ず壊す…」

キュルケを倒された事を知ったタバサは、守りを捨ててゴーレム  
の破壊のみに全力を注ぐ決心を固めた。その過程で何が壊れようが  
知ったことか。

タバサは宝物庫の防衛の事すら完全に頭から捨て去り、自身に唱  
えられる最高の魔法をもつてゴーレムに挑んだ。

「覚悟…！！アイス・ストーム！！」

風と水の複合魔法、アイス・ストームでゴーレムに挑むタバサ。  
先ほどのエア・ハンマーにより拳にヒビが入っていたこともあり、  
拳を破壊することには成功した。

だがそれもわずかの優位、すぐにゴーレムの拳が再生されるのを  
タバサは見てしまった。

「もう精神力もあまりない…。どうすれば…」

時間稼ぎどころか、自分たちのダメージを軽減するのに手一杯で  
そのために使った精神力のほうが遥かに上。このままではルイスが  
復帰するまで、到底持ちそうにない。

だが、誰もが絶望したときに希望は舞い降りことがある。

「うあああああー！ーっ！！！！！」

絶叫と共にゴーレムの足が砕かれ、片足を失ったゴーレムがバランスを崩し倒れる。そしてゴーレムの片足があった場所からは、上半身の衣服を失った才人が現れた。

「生きてた…！？」

才人の異常さをあまりよく知らないため、先ほどの時点で才人が死んでしまったのではないかと思っていたタバサ。そんなタバサの前にし、才人は彼女の頭を優しく撫でた。

「悪かったな、遅くなって。後はオレに任せろ」

タバサはその言葉に、こくりと首を縦に振って頷き、足早にその場から退散。気絶しているキュルケの元に向かい、手当てを始めた。

「さて、と…。さつきは悪かったな、思った以上にお前ができるのと、オレ自身もまだまだ実戦経験が足りないみたいだな。ちよっくら意識を失ってたんだ」

指をベキバキと鳴らし、その度に全身から発するオーラを大きくしていく才人。

「本来なら身体慣らしに遊んでやるところだったが…気が変わった。仲間たちを傷つけやがった報いだ、一発で終わりにしてやる」

才人は開いた両腕を前に合わせ、即座に腰だめへと両腕を移動させる。その眼前ではゴーレムが全身の修復を完了し、両腕の拳を使って再び才人を叩き潰そうとしていた。

「ああ、めえ、はあ、めえ……」

少しずつ高まっていく力を、両拳の中に押さえ込み機会を伺う。ゴーレムが目前にまで迫ったそのとき、不意に絶大な威力の爆発がゴーレムを襲い、右半身をまるごと消し飛ばした。

びっくりした才人が周囲に気配を向けると、少し離れたところに杖を持った右手を左手で支えながら、立っているルイズがいた。

ほんの一瞬ではあったが、片目を瞑ってルイズが合図をするのを



才人は確認。おそらく、トドメを刺せという意思表示なのだろう。

「これでトドメだ！！波ーーーーーっ！！！！！！！！！！」

損失箇所の莫大なゴーレムを修復するには、時間が大きくかかる。才人はその隙を与えず、かめはめ波を空に向けて放った。

真正面に向けて撃たず、空に向けて撃つたのには理由がある。正面に撃てばこの辺一帯が確実に消し飛ぶが、空に向けて撃てばせいぜい余波程度で済む。

そしてフーケのゴーレムを倒すのは、その余波程度で十分であった。勢いでゴーレムが持ち上がり、そのまま全身がたちまちのうちに消滅していく。

後に残ったのはクレーターが穿たれた学院の地面と、余波被害を少し食らって建物の一部が消し飛んだ魔法学院、そして若い身空で大健闘をした少年少女たちであった。

「何てヤツだい、まさかアタシのゴーレムが完全にやられるなんて……。途中で土人形と入れ替わってなけりゃ、アタシ自身があの世行きだったねえ……」

フーケは消し飛ばされることなく、何とか無事であった。

若きメイジの意地！見せる貴族の根性！！（後書き）

ついに使わせちゃいました、かめはめ波。

実はルイズに使わせようとも考えていたのですが、先に前話で

ギャリック砲を撃たせたので自重してやめました。

その代わりに、未覚醒ながらも全力エクスプロージョンを使わせました。

強さを磨け！微熱と雪風の修行編 前編（前書き）

フーケ編ほぼ壊滅。

舞踏会もなしで、オリジナルな展開に突入します。

## 強さを磨け！微熱と雪風の修行編 前編

翌朝、学院長室はすったもんだの大騒ぎとなっていた。学院の建物が綺麗さっぱり削り取られ、不自然なクレーターが出来上がっていたりしたのだ。

教師達は生徒たちに不用意な外出を禁じた後に、調査を開始。早朝からお昼近くまで数時間近くぶっ通しで続けられた調査の結果、次の事が判明した。

- 1・宝物庫の壁に、崩壊一步手前のヒビが入っていたが何とか崩壊は避けられていた。
- 2・噂に名高い『土くれのフーケ』を連想させるような、巨大ゴレムの足跡がいくつも残っていた
- 3・削り取られた建物は、固定化を完全に無視するほどだった

以上の事柄を踏まえて議論がされた結果、「やっぱりわからん」が学院側としての総意となった。

しかし誰も口には出さなかったものの、今回の一件でフーケが学院を襲ったものの、目的を果たせなかったということだけは理解したようだ。もしかしたら今回の事件によって、振り返ちに遭ったのかもかもしれない。

シュヴルーズやコルベルは王室に今回の襲撃の事を話すべきだと主張したが、オスマンはそれを認めず、フーケがここを襲った事そのものをなかったことにすることにした。

王室の調査が入れば、細かに調べられて厳しい追及を受けることになりかねない。ならばはじめから、昨日は何も起きなかったとするのが一番いいのだ。

大人たちが今回の事件への対応を決めた頃、才人・ルイズ・キュルケ・タバサは学院から姿を消していた。  
いや、それどころかトリステイン、果てはハルケギニアそのものから姿を消していた。

才人は今回の戦いを終えた後に、ルイズに促される形で自らの事柄を全てキュルケとタバサに打ち明けた。

話を聞かされた二人は酷く驚いたものの、才人の強さの秘密を知りある意味納得もしていた。そしてその強さを真つ先に欲したのがタバサだった。

タバサは普段からは想像できないほどの物凄い剣幕で才人に迫り、手解きを頼み込む。それだけならまだしも、今回の戦いで一番最初に脱落してしまったキュルケも才人に手解きを頼みだしたため、もはや才人は断りきれずに手解きを行うことになった。

だがハルケギニアでは色々と目立ちすぎるため、才人は異次元空間への入り口を開き、その中に全員を招き入れた。

無数にある異次元空間の1つ、『精神と時の部屋』へと。

「こ、ここは…!?!」

「空気も薄いし、周囲の感覚が掴めない…!!」

まわりを見回しても、同じような風景が延々と続くばかり。キュルケとタバサは呆気にとられるばかりであった。

「気をつけなさいよ、この空間は最大で惑星一つと同じ分くらいの広さであるんですって。好奇心出してどっかフラフラと行っちゃうと、マジで死ねるわよ」

「な…!?!わ、惑星一つ分の広さ!?!」

あまりの広さに、驚愕するしかないキュルケとタバサ。そんな二人をよそに、準備を整えた才人が全身の力を一気に開放する。

ドズンッ！！！！

「！！！！！！！！」

何の前触れもなく響き渡る衝撃に、タバサとキュルケはその場に倒れこんでしまう。

「今のは、何：？」

「今のは…オレが全力を開放しただけだな。ぶっちゃけた話、昨日までの半分に減っているんだけど」

「え、半減…？何故…？」

昨日と今日とでは、パワーが半分に減っている。疑問を抱いたタバサは才人に質問を投げかけた。だが、その質問に答えたのはルイスだった。

「タバサ、その質問には私が答えるわ。私が才人に頼んだのよ、半分力を頂戴ってね。そしたら少し悩んだけど、最終的には快く力を貰えたわ」

「…才人、それ本当なの…？ヴァリエールに、力を半分あげたって…」

突飛すぎる展開に頭を抱えなくなるも何とか精神力で持ちこたえ、才人に真偽を確かめるキュルケ。

「ああ、やったぞ。その後ちよつとだけ手合わせをして能力傾向を確かめたんだが、ルイスは魔術系に類する技の扱いが得意みたいだったな」

「逆に才人は、物理攻撃メインの技の扱いに長けていたわね。私たち、ちよつどいい具合にお互いの得意分野がはつきりと二分されたみたいね」

「は、はは…」

「…化け物が増えた…」



は確かに魔法メインだけども、魔法だけで全部何とかできるとは限らないのよ?」

この日ルイズは、二人が未だに魔法以外の戦闘方法を積極的に取り入れないことについて注意をしていた。タバサは出自に何かあるのか、多少は魔法以外の戦闘方法も心得ていたがキュルケは魔法以外の戦闘技能は皆無だったのだ。

「だつてえ〜…」

「だつてもクソもあるか!!! そうだ、キュルケあんた魔法剣士とか目指してみたどうかしら? 得物はこの間買った剣を使えば無駄銭にもならないし、多少興味ありそうな発言してたじゃないの」

「いや、興味あるのと実際にやるのとは別問だ

ビツ、チツ!

「何か言つた?」

キュルケの頬を紫色の細長い光線がかすめ、浅く出血した。

「な、何でもないデス…。アハハ…」

その光景を見ていたタバサは、あまりの恐ろしさにこう呟いたという。

「見えなかった…。何かが光つたようにしか…」

その表情は一見すると普段とあまり変わりが無いように見えるが、実際のところは滝のような汗を流し、全身がガクガクに震えていた。「不用意な発言は慎むことね。心臓を今の光で貫かれなくなかったら、ね…」

人差し指を向けて宣告するルイズを前に、もはやキュルケもタバサも反論する気力さえ失われていた。

彼女たちにとっての地獄はまだ、始まったばかりである…。



**強さを磨け！微熱と雪風の修行編 前編（後書き）**

今回、あまりいい話が浮かばなかったので一旦ここで切りました。  
次あたりで修行編は終了の予定でいます。

この話での精神と時の部屋は、悪のブウに壊された状態です。  
寝床や簡易食料などはありませんが、扉はないです。  
即ち、才人なしでは出入りできません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4119w/>

---

魔人の力を宿した使い魔

2011年10月28日12時06分発行